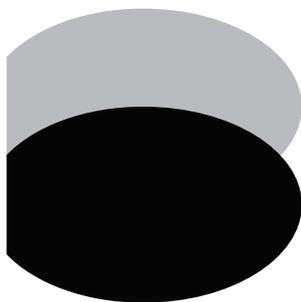


20240731

絵本学会 NEWS No.79

発行：絵本学会
発行日：2024年7月31日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒100-0003
東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F
(株)毎日学術フォーラム内
電話：03-6267-4550
Mail：maf-ehongakkai@mynavi.jp
HP：http://www.ehongakkai.com



絵本学会

- ・会長あいさつ
- ・第27回絵本学会大会(6月8日～9日)開催報告
- ・第27回絵本学会定期総会議事録
- ・2023年度活動報告、2024年度活動計画、新役員一覧
- ・第5回日本絵本研究賞選考結果報告
- ・研究賞運営委員会からのお知らせ
- ・研究委員会からのお知らせ
- ・紀要編集委員会からのお知らせ
- ・事務局より
- ・絵本学会理事会議事録

■ 会長あいさつ ■

絵本学会 会長 水島尚喜

この度、会長としてご承認いただきました水島尚喜です。学会長の重責を果たすべく精一杯尽力いたします所存です。

ご承知のように、前理事会におきまして本学会は「日本学術会議協力学術研究団体」に認可登録されました。学術研究団体として正式に承認されたわけですが、このことは同時にアカデミック・ソサエティとして、社会的なミッションを果たす責任があることを意味しています。その点を踏まえた上で、前理事会は倫理規定の整備など、協力学会の資格に相応しい形を描こうとされました。一方では、学会運営の持続的観点から事務局業務の一部を外部委託し、合理化を推進されました。コロナ禍中にありながら、これらの対応を力強く実行されましたことに、心より敬意を表します。

今期の理事会においては、それらの方向性を拡充すると同時に、更なる見直しを進める所存です。例えば、学会事務の一部アウトソーシング化は行われていますが、依然として業務の大半は、人と人との細やかなやり取りで遂行されています。時には許容範囲を越えて、担当される理事や部署の方の自己犠牲の上で遂行される場合があります。対応する規則の改訂を実施し、サステナブルな学会運営を目指します。また、本学会では多様な領域に軸足を置くという学際的特性があり、さらに研究者だけではない幅広い学会員のニーズに対応する必要性もあります。アカデミックな深度を目指す組織体である一方、絵本文化の豊かさを体現し共有する広がりを目指す組織体でもあるわけです。このように相反する要素をどのように止揚していくかが問われています。

以上の点を踏まえた上で、私見ではありますが、今後の課題と考える内容を以下にお示し致します。

- * 各委員会の業務内容の見直しと統廃合：協力学会として対応し、活動形態を目指して、委員会間の調整などを図り、合理的な運営を行う。また、会報等の情報内容を紙媒体による配送から電子配信へ移行することについて、その適正な範囲を探る。
- * 学会活動活性化のための方策：研究領域毎の「研究部会」の創設と継続的な展開実施について、ワーキンググループで検討する。
- * スムーズな大会開催を目指して：多忙化を極める大学での勤務実態を背景に、大会実施のハードルが年々高くなっている。従来を基幹とする大会運営から、地域の行政や美術館等との連携開催など、柔軟な大会運営、組織化の可能性を探る。
- * 海外との交流事業：グローバル化社会に対応し、海外の学会や組織との交流事業を検討する。海外イベント参加も含めたスタディツアー、国際的な連携研究などの可能性を探る。併せて、本学会英文名称の再検討が必要。
- * 学会誌『絵本学』の充実の方策とアーカイブ化の推進：「研究賞」の在り方を考慮した上で、『絵本学』の質の担保/向上を目的としての電子アーカイブ利用へのロードマップを作成する。
- * 「学会創立30周年記念企画」：今期理事会の最終年が、本学会創立30周年に該当。記念誌の発刊や関連行事などについて実施の可否を検討する。
学会員の皆様の言葉に耳を傾け、共に絵本文化を大切に育てていくことを願っております。今理事会へのご協力方につきまして、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第27回絵本学会大会 (6月8日～9日) 開催報告

第27回絵本学会大会 実行委員会

2024年6月8日(土)と6月9日(日)の2日間にわたって第27回絵本学会大会が、聖心女子大学(渋谷区広尾)をキーステーションとし、オンラインによって開催されました。すでに、2023年5月に、新型コロナウイルスの感染法上の分類は、二類相当から五類相当に緩和されていましたが、大会の受け入れに関する諸事情により、今大会は急遽リモート開催となりました。

申し込みは、peatixを通して行われ、オンライン決済によるチケット販売が行われました。大会参加者として、総数210名の有料申し込みがありました。その内訳は、会員、準会員(院生など)143名、学生(学部生)9名、一般58名となりました。尚、会員で委任状のみの登録が若干名ありました。当初見込みより少ない参加者数となり、また、機材方面のトラブルが多かったことも事実で、今後の大会運営への反省点として生かしていきたいと考えます。

「希望としての絵本～明日を生きるために～」が、今大会のテーマでした。今日、地震や津波などの自然災害のみならず、地球規模の異常気象や、地域紛争や戦争など、危機的と思われる世界状況への深刻な懸念があります。これは、この時代を生きている誰もが共有している一般的な感覚であろうと思われまます。そのような危機的な世界状況に直面しながらも、なお、「絵本」は、明日を生きるための希望となりうるのか、その存在性や可能性について、改めて問いかけたいと考えました。

以上のような大会テーマをもとに、斯界にあって平和と環境の問題について先鋭的に発言されている詩人、絵本作家のアーサー・ビナード氏に第1日目の基調講演をお願いしました。「日本絵本賞」を獲得した『ここが家だ ベン・シャーン』の第5福竜丸』などのビナード作品は、シリアスな現実世界の真相を、絵本という媒体を通して、より陰影を際立たせています。今回の基調講演では、田窪恭治が制作したモザイク壁画「黄金の林檎」の前で、イタリアの国民的童話作家ジャンニ・ロダーリの絵本『キンコンカンせんそう』を朗読する場面がありました。その朗読からは、ナンセンスのセンス(意味)を明らかにし、戦争の不条理を相対化しようとする明確な意図が感受できました。ちなみに、ロダーリは、国際アンデルセン賞を1970年に受賞しますが、その際のスピーチで次のように述べています。

「私たちが言ったことは真実になる可能性があります。本当の問題は、それを真実にするために正しいことを言えるかどうかです。誰も魔法の言葉を持っていません。私たちは皆、あらゆる言語で、謙虚に、情熱を持って一緒にそれを探さなければなりません」

ロダーリを朗読するビナード氏からも、同様な思いが放射されていました。

他方、今大会、ウクライナ在住の絵本作家、ロナマ・ロマニーンさんとアンドリー・レシヴさんから「いま、ウクライナから、私たちの声を」というビデオメッセージを寄せていただき、大会2日目にオンデマンドにより公開しました。ロナマ・ロマニーンさんとアンドリー・レシヴさんは、2015年に刊行された、絵本『戦争が町にやってくる』の作者であり、ポローニャ・ラガッツィ賞を受賞されています。当学会では、今次のウクライナ戦争に際し、2022年4月8日に英語圏児童文学会理事会と日本児童文学学会理事会と当学会理事会の三者による「共同声明」を発し、子どもたちを含む民間人への攻撃に対して抗議のメッセージを発信しています。この企画は、この精神の延長上にあるものとも言えます。

一方、ラウンドテーブル①は絵本作家の長野ヒデ子氏をゲストに「絵本と戦争～非平和という概念を軸に」というテーマで、進行了しました。また、ラウンドテーブル②は、「かがくい絵本と子どもの笑顔～障がい児への眼差し」のテーマで、ジャーナリストで特別支援学校時代に作家の同僚であった佐藤幹夫氏をゲストに迎えました。いずれも、不条理な状況に対し、絵本が希望としての心的機能を果たすことが明らかにされていました。

2日間に渡った研究発表では、A～Eの五つの部屋で各3名の発表があり、それぞれ2名の座長が担当しました。尚、直前に発表者1名から発表辞退の申し出がありました。また、作品発表では4名のノミネートがありました。「絵本」を研究対象とする本学会において、大会のオンライン開催にはもどかしさがあったことは、事実です。絵本が大切にしている「触覚的感性」のやり取りには、オンラインは不向きです。特に、ビジュアルを基軸にする「作品発表」の場では、その思いを強く持ちました。しかし、「研究発表」などの内容面では、論考成果が可視化しやすく、研究の深度が伝えやすかった側面もあります。結果、大会開催の方法として、対面開催とリモート開催は、別物であるという認識を持つべきであることを実感しました。その意味で、今大会では多くの示唆が得られた場であったと言えます。

ご尽力いただいた、関係者各位に心より感謝申し上げます。

(文責：水島尚喜)

— 第 27 回絵本学会大会実行委員会（敬称略） —

藤本朝巳（絵本学会会長）
丸尾美保（絵本学会会長代理）
佐々木由美子（東京未来大学）
馬見塚昭久（常葉大学）
鈴木穂波（大阪大谷大学）
宮崎詞美（横浜美術大学）
山本美希（筑波大学）
穴澤秀隆（國學院大學栃木短期大学）
辻政博（学習院大学）
有福一昭（有明教育芸術短期大学）
木下ひさし（聖心女子大学）
宮下理恵子（聖心女子大学）
水島尚喜（聖心女子大学・大会実行委員長）
菊地俊公（聖心女子大学学習支援センター）



アーサー・ビナード氏
(モザイク壁画『黄金的林檎』の前で 2024/06/08)

基調講演

講演テーマ

『さがしています』をさがしつづける

絵本をレンズに、この揺れる列島のこれからを見つめよう。

アーサー・ビナード氏（詩人・絵本作家）

アーサー・ビナードさんは1967年、米国ミシガン州生まれ。ニューヨーク州のコレゲート大学で英米文学と日本語を学び、卒業と同時に来日、日本語でも詩作を始めた。『釣り上げては』（思潮社、2000）で中原中也賞を受賞。絵本の原作や翻訳に取り組んでいる。

講演のなかでアーサー・ビナード氏は、自身が翻訳された『キンコンカンせんそう』（作：ジャンニ・ロダーリ、絵：ペス、訳：アーサー・ビナード、講談社、2010）を朗読された。

『キンコンカンせんそう』の内容は次のようなものである。

A国の将軍と、B国の将軍は、ともにドデカ大砲という、巨砲の製造を競った。

そのために、国内の教会や時計塔などのあらゆる鐘を供出させて、大砲を铸造した。ところが、いざ実戦になって、ドデカ大砲をぶっ放すと、不思議なことに砲身から、美しい鐘の音色が響き渡った。両軍の兵士たちは、郷愁をかき立てられ、あるいは祭りを想起してうかれだし、戦争状態は、なし崩し的に消滅してしまった。

戦争というのは、いつの時代も権力者の都合で引き起こされるものであり、民衆は対立感情にとらわれることなく、すべての戦争に反対し、停戦を主張すべきだ。『キンコンカンせんそう』は、このロジックにハッキリ立っている。

アーサー・ビナード氏は、二門の大砲は、広島と長崎の原爆の爆弾本体の通称である「リトル・ボーイ」と「ファット・マン」になぞらえて訳出したと語られた。

広島と長崎の原爆は、原料も仕組みも異なるタイプの破壊兵器であった。これは、原爆投下には、兵器の実験研究という面があったためだ。けれども唯一の被爆国民でありながら、私たちはこのことをほとんど知らない。アーサーさんは、その知らないという事態を知る必要があると指摘された。

その後、広島市の広島原爆資料館に収蔵されている被爆者の遺品や資料の写真をもとに構成された『さがしています』（作：アーサー・ビナード、写真：岡倉禎志、童心社、2012）を紹介された。

この写真絵本は、もの言わぬものたちに光を当てている。そ

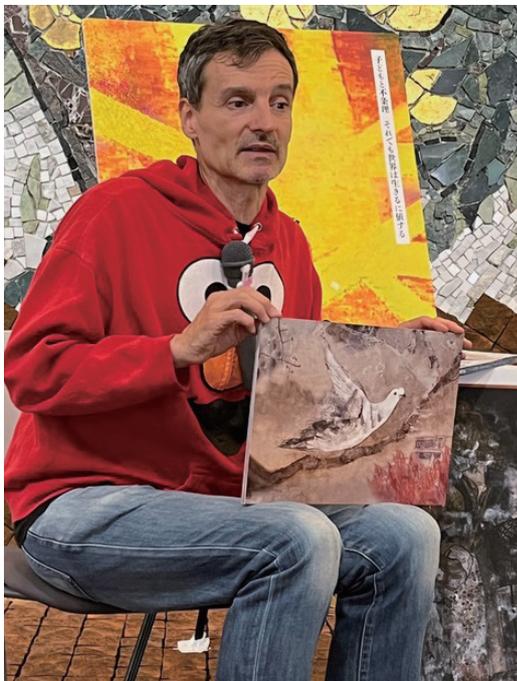
して、アーサーさんは、これらの無言のものたちを、カタリベと呼んでいる。人は声のないものにも、耳を寄せてつぶやきを聴くことができる。そのことから、事実を探求することが重要だと述べられた。

さらに、南太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁の水爆実験で被爆した第五福竜丸事件（1954）を題材にした『ここが家だーベン・シャーンの第五福竜丸』（絵：ベン・シャーン、構成：アーサー・ビナード、集英社、2006）を紹介された。

アーサーさんは、この事件でなくなった船員の久保山愛吉さんの運命と生涯を「忘れない」とする人々がいる一方、「わすれるのを じっと まっている ひとたちもいる」（同書、40 頁）という、おおきな構造が存在すると語られた。

アーサー・ビナード氏の絵本の世界への関わりの多くは、社会や環境の問題意識に発している。だが、講演はまったくお堅いものではなかった。オンラインであることのもどかしさはあった。けれども、いたずらっぽく、ユーモアたっぷりのアーサーさんの語り口に、私たちはすっかり釣られてしまった。

（文責：穴澤秀隆）



研究発表

研究発表 A 座長：藤本朝巳、浅野法子

1. 劉娟（横浜国立大学非常勤講師）

2000 年以降の中国における翻訳絵本の諸相—日本語原書を対象に子ども観のアプローチから

本発表では、2000 年以降の中国において、絵本の翻訳がそれを取り巻く時代や社会によって形成された子ども観から、どのような影響を受けてきたかについて、日本語から中国語に翻訳した絵本のなかから具体例を抽出し、テキスト分析を行った。具体的には、幼児語（林明子、松谷みよ子「あかちゃんの本」シリーズ）、性に関わる内容（山本直英「おかあさんとみる性の本」シリーズ）、中国の子どもになじみのない動植物の名前（いわむらかずお「14 ひきの」シリーズ）を翻訳する際の変更・工夫及びその背景にある要因について考察した。

質疑応答では、「幼児語とオノマトペの違い」、「これらの翻訳絵本が中国の教育現場ではどのように思われているか」などのご質問が出された。発表者からは「今後は絵本を翻訳する際の変更・工夫についての問題点、改善すべき点を明らかにすることを課題としたい」との発言があった。

2. 尹 惠貞（一橋大学大学院特別研究員）

絵本の翻訳—「重訳 (relay translation)」再考

発表者は、Dollerup (2014) の重訳理論により、藤本朝巳の翻訳作品『トッケビのこんぼう』（2003）と『さびしがりのトッケビ』（2006）（平凡社）を、藤本へのインタビュー（3 月）内容を紹介しつつ、絵本翻訳の特徴を分析・考察した。

両絵本の奥付には翻訳協力者が明記されていること、『トッケビのこんぼう』には英語版 *The Magic Stick of Plenty* (1996) があり、翻訳過程における両絵本の差異についても言及している。

絵本翻訳は文字のみの翻訳とは異なり、絵を読むことも極めて大事な作業である。絵本翻訳の過程を可視化し、翻訳理論に更なる視点を提示する発表であった。

なお『トッケビのこんぼう』の翻訳については、英語訳、日本語訳に関しては、それぞれの国の慣習が異なるので、そのことが翻訳する際に考慮されていることが座長から付け加えられた。

3. 池畑裕介（中国文化大学講師）

ピアラーニングを用いた絵本の 会話授業その実践研究 — 社会人上級学習者を対象に —

<発表内容>

発表者は台湾における大学附属の生涯教育機関において社会人日本語会話教室（上級レベル）を担当しており、創造的で、上級者でもさらに学べる活動が求められる。そこでピアラーニングと絵本を使い、学習者の価値観や経験の発言を促そうと考え、試みている。ピアラーニングの学び合いによる自分の視野の広がり・自分自身を発見すると言う目標が達成できたと思われる。また絵本の価値観・経験語りとの相性の良さも見られた。

<当日の様子・質疑応答> 発表者より

絵本を日本語の教材として使用しているケースは大変少ないと認識しておりましたが、会場からの意見で、韓国においても使用していると伺い、絵本の広がりを見せていただきたいと思います。また、できることなら研究においても共同をしていきたいと思いました。

研究発表 B 座長：鈴木穂波、山本美希

1. 冷韜（筑波大学大学院生）

日本の童画に見られる花の擬人化表現—視覚的デザインの観点から—

明治後期から昭和戦前期における日本の童画に見られる花の擬人化に焦点を当て、デザインの観点からその表現を分析した研究である。花を和装の人物として擬人化したものや、花が人間と同様に障子や畳のある家に暮らす様子を描くものなど、日本独自の表現が見られたが、一方で西洋において描かれた花の擬人化の図像を参照した作品もあり、西洋からの影響も指摘された。会場からは、日本と西洋において擬人化の定義そのものに差異があるのか、物語の挿絵の場合には物語内容も検討する必要があるのでは、といった質問があり、活発な質疑応答が交わされた。

2. 張政婷（東京大学東アジア藝文書院特任研究員）

死をテーマとした絵本における動物の登場人物— 1990 年から 2022 年までの英国、米国、日本、台湾の描写を探る —

死をテーマとした絵本のうち、擬人化された動物が登場する 14 冊を取り上げ、児童文学や YA における死の描写に関する議論を参考に分析した研究である。結論では、英米と日本、台湾それぞれの国ごとの傾向が述べられた。会場からは、児

童文学・YA・絵本の用語の定義について、また 14 冊を代表とした理由について質問が出された。興味深い研究テーマであるが、国の傾向として結論を出すには、研究対象・研究方法にあらためて検討が必要であると思われる。研究の一層の発展を期待する。

3. 梅野愛子（日本女子大学大学院生）

Ente, Tod und Tulpe のチューリップをめぐる一考察：登場人物の関係性と寄りそう表象

ヴォルフ・エアルブルッフの *Ente, Tod und Tulpe*（邦題『死神さんとアヒルさん』）におけるチューリップについて、「ケアの倫理」を理論的参考にして分析した研究である。チューリップはテキストでは触れられないが、原書のタイトルには含まれ、序盤と終盤に描かれる。地面から生えている花との対比や、アヒルの体の状態との相似から、アヒルの被傷性（有限の命）を象徴していると捉えられるだけでなく、死を見送る者（死神）の被傷性をも表していると発表者は論じた。質疑応答では、読者と本作の関係についての質問のほか、原作の「死」の文化的・宗教的背景と本発表の解釈との関連についても質問があった。

（文責：山本美希）

研究発表 C 座長：丸尾美保、木下ひさし

1. 永田桂子（元・京都女子大学大学院非常勤講師）

「絵本」研究の視点—絵本観の広がりを背景に—

発表者は、今日の絵本は従来絵本と無縁であった企業や医療現場、地方自治体が関わるものなど百花繚乱であり、絵本コンテストや絵本を取り扱う資格など、「絵本」にまつわる状況が拡大していることを報告したのち、日本での絵本研究が他国を牽引していることや「絵本 ehon」という用語の広まりについても言及し、絵本研究に際しては、立ち位置を明解にし、歴史と伝統を踏まえてこの先の絵本を考えていくことが大切であると。また、長年の研究成果である日本絵本史の図や「絵本に内在する機能」と「社会活用性」をまとめた表を提示したうえで、絵本の多様性が拡大している現在、さらに改訂の必要性を感じていると締めくくった。

発表後、赤本などの絵本を大人と一緒に楽しんだという日本の絵本の歴史から観ると、教育を重視する中国の絵本観などとは異なる独自の絵本観があるのではないかとの質問に、発表者から江戸時代の『訓蒙図彙』など教育的な絵本の潮流もあったことが説明された。次の発表が取り下げとなったため、デジタル絵本についても話し合う機会が持たれ、発表者からは絵本は手で持って扱えるのが基本でデジタルは別の感性に

働きかけるものと考えているとの発言があり、会場からは生まれたときからスマホなどに囲まれている親子に紙の絵本のよさを伝える必要があるとの発言もあった。また参加者から、絵本は、従来の平面の絵画による絵本、立体や質感を工夫した絵本、デジタル絵本の三種に分かれて展開していこうという見解も述べられた。

2. 発表取り下げ

3. 小松麻美（神戸芸術工科大学）

尹惠貞（一橋大学）

韓国の絵本専門図書館のバイオニア

— 10周年を迎える順천시立絵本図書館の取り組み—

まず、小松氏から、韓国初の市立絵本専門図書館として設立されて10周年を迎える順천시立絵本図書館の取り組みに関して、併設している美術館の活動を中心に、視察を元にして報告された。また、画像を提示しながら、開催中の第26回企画展示展であるスージー・リー展について、絵本作家による絵本学校や小学生対象のワークショップなどについても言及された。次に尹氏から、順천시立絵本図書館のハルモニ（おばあさん）たちへの識字プログラムから生まれたハルモニたちの絵日記を日本語に翻訳中であることが説明され、各ページの図像を見ながら内容が紹介された。

会場から、韓国では他に公立の絵本関連施設が設立されているかとの質問があり、小松氏から公立の図書館の例が挙げられ、絵本ビエンナーレなどを行う地域や絵本専門書店の近年の出現について言及された。韓国の絵本が隆盛である背景についての質問には、二人の発表者から韓国の絵本作家が海外で評価を得て逆輸入されたことや、韓国の絵本作家が最初からグローバルな視野で絵本の出版を目指しているとの回答がなされた。

（文責：丸尾美保）

研究発表 D 座長：馬見塚昭久、佐々木由美子

1. 小屋美香（育英短期大学）

前徳明子（埼玉東萌短期大学）

絵本を通じた保育者の専門性の育ちに関する考察

— 認定絵本土資格を持つ保育者へのインタビュー調査から—

養成校で認定絵本土の資格を取得し、現在は保育現場で働いている4名の保育者に面接し、絵本に関する学びや資格が保育者としての質の向上や専門性の育ちにどのように影響しているのかを考察した研究である。得られた情報は、「入学前・

受講前」「講座受講中」「認定後・卒業まで」「卒業後・現在まで」の4期に分けてTEM図にまとめて分析。その結果から、絵本に関する高い興味・関心、講座での学び、現場での絵本活用の実践が、保育の質の向上につながっていること等が明らかとなった。また、認定絵本土を対象とした情報共有や公開講座など、養成校としての継続的なフォローの必要性なども示した。参加者からは、丁寧な効果検証を評価するとともに、資格取得のカリキュラムを経た学生とそうでない学生との卒業後の意識の違いや、その後の学び合いについての更なる研究を期待する声があった。

2. 相沢和恵（元・保育者養成校教員）

矢阪亜希子（財団職員）

参加者が一体感を持って絵本を楽しむ「おはなし会」開催の意義

— 1冊の絵本の読み手が2人以上の読み合いについて—

おはなし会において、一冊の絵本を1人で読む場合と複数名で読む場合とでは、読み手と聞き手の心の動きにどのような差異があるかをアンケート調査し、複数名で一冊の絵本を読むおはなし会開催の意義について探ることを目的とした研究である。調査結果の分析から、読み手にとっても聞き手にとっても、絵本に対するイメージや解釈が拡がり、一体感が生じることが解明された。そこから考察を深め、読み手と聞き手の相互作用によって絵本を読み合う楽しみを分かち合いつつ、繋がり合いを意識することの重要性等を示した。また、複数名で読むのに適した絵本の厳選や読み方の工夫をさらに重ねていくこと等を今後の課題とした。参加者からは、チーム読みによって読み手の作品理解がどのように深まったのかを検証していくことで、質的な研究を深められるのではないかなど、研究の更なる発展に期待する声が寄せられた。

3. 村田康常（名古屋柳城女子大学）

黒岩茉由（名古屋柳城短期大学附属柳城幼稚園）

子どもの絵本体験の多様性と収斂点

— 保育者と絵本を読みあうエピソードの記述から—

保育現場での子どもの絵本体験を、保育者と子どもの「共同作業」によって成立する「共有体験」と捉え、その収斂点としての保育者の存在意義について、絵本の読み合いに関する3つのエピソード記録から読み解いた研究である。分析と考察の結果、保育者が子どもたちに絵本を読むことで、個別的な絵本体験が共有体験となる「場」が形成されることが示された。その「場」においては、保育者が扇のかなめ（収斂点）となり、子どもたちが扇の面となるが、保育者は、子どもたちの言動を笑顔で肯定的に受け入れ、子どもたちと呼吸を合わせながら絵本の世界を一緒に進んでいく態度が必要だ

との結論である。参加者からは、収斂点という言葉が尊重しつつも、限定的な意味で使うのではなく、楽しさを伝え合う媒介者のようなイメージとして捉えてもいいのではないかとの意見があった。

(文責：佐々木由美子・馬見塚昭久)

研究発表 E 座長：水島尚喜、有福一昭

1. 山本美希（筑波大学）

「日本における文字なし絵本の歴史 – 19-20 世紀前半の事例調査」

文字なし絵本は 1990 年代以降飛躍的に作例が増え注目が高まっているが、1960 年代以降に研究が始まったと言われ先行研究は少ない。2023 年度からの継続研究で、今回は 19-20 世紀前半までの「文字なし絵本」の事例調査と関連分野のサイレント・コミックや大人向け文字なし物語も対象とした歴史研究である。

「文字なし絵本」を中心に 1965 年までで絞り込み、19 世紀半ばからドイツやフランスでサイレント・コミックやフランスの「Le chat noir」やイギリスの「Punch」等に掲載された作品事例を紹介し、さらに日本における文字なし絵本表現が児童雑誌におけるサイレント・コミック、絵本、教科書の三つの媒体に掲載されている事例をもとに欧米の事例と関連性について仮説的に考察している。今回は前回事例報告の残りとして新たに発見されたものなどの調査経過、日本とアジア圏（中国）の文字のない表現を中心に報告された。筆者は、日本の①雑誌「小国民」「アサヒグラフ」「金の船・金の星」など、②金井信生堂の絵本や武井武雄など作家の絵本、③教科書の中に出てきた文字なし絵本を紹介し内容比較を行い表現の違いに言及している。また、中国の文字なし絵本の事例を紹介している。

今後さらに中国、アジア圏の事例を中心に調査を進めていく予定で、これまで顧みられてこなかった文字のない絵本表現の可能性と歴史探究が期待される。

2. 伊藤敬佑（白百合女子大学非常勤講師）

「1970 年前後フランスの絵本状況における、フランソワ・リュイ＝ヴィダルの新規性」

1967 年から多くの絵本を出版したフランスの絵本編集者、コンセプトであるフランソワ・リュイ＝ヴィダル（以下 FRV）の仕事丁寧に紹介し、誤解や間違えて伝えられている点について修正し、手がけた絵本の新規制について言及した研究である。日本ではあまり知られていないが、谷川俊太郎 訳で「ストーリーナンバー 1」などの絵本も出版されている。フランスで

は当時は多くの児童文学関係者から「子どもに悪影響を与える」と不評、批判を受けていたが、その後彼の手がけた絵本は先駆性があると評価され回顧展などが開催されている。日本で FRV を紹介した記述で「子どものための芸術 etc. はない。」という理念がアメリカのクイストの影響を受けていると伝えられているが、事実ではないことと資料を用いて筆者は否定している。また FRV の新規性について筆者は、「Ah! Ernesto!」を詳細に紹介しながら、①既存の権威、価値観への反抗、②子どもの「状況に適応して生きる力」への信頼性、③「テキストの書かれた場面を描く」のではない絵という絵の独立性、④叙事的、説明的な絵ではなく、何かを象徴している絵と言及し、その根幹には子どもの理解力、解釈力への信頼性があるのではないかと仮説を立てている。

絵本制作にとって重要なファクターであるひとりの編集者を丁寧に調査し、作品から具体的な特徴を読み解く貴重な研究である。

3. 村田端綺（武蔵大学、法政大学非常勤講師）

「アンドレ・エレとおもちゃ」

19-20 世紀フランスの代表的な絵本作家アンドレ・エレとおもちゃの関連性についての発表である。おもちゃをモチーフとした楽譜絵本「おもちゃ箱」（後に楽譜なし絵本も出版）と、絵本に登場する動物がおもちゃのモチーフとなっている「ノアのはこぶね」（プランタン百貨店出版され、後に表紙を変え「おかしな動物たち」出版）。その他にもおもちゃをモチーフとした要素が入った様々な絵本を紹介し、エレの絵本とおもちゃの関係性の深さを紹介した。19 世紀前半まではフランスのおもちゃはドイツからの輸入に頼っていたが、19 世紀後半から国内生産の機運が高まっていった。社会的要請が増えた中、エレの絵本に登場するモチーフのおもちゃはプランタン百貨店から販売され、評価も獲得していった。筆者はエレのおもちゃに対する考えを元に、前述した「おもちゃ箱」と「ノアのはこぶね」の内容を分析し①エレの絵本におけるおもちゃは、現実世界をデフォルメする役割を持っている。②エレの画風と素朴なおもちゃが呼応し、おもちゃの世界と絵本の世界をつないだ、とエレの絵本のテーマにおもちゃとの親和性があったと言及している。

フランス絵本黎明期の代表的な作家であるエレについてのさらなる研究が期待される。

(文責：有福一昭)

作品発表

司会：辻政博（学習院大学）、宮崎詞美（横浜美術大学）

作品発表会は、6月9日（日）13:00～14:20 にリモートで実施された。発表者は、以下の4名。

発表① 高坂結実氏（元公立小学校教諭）の『でんでんむしのかなしみ』は、新美 南吉の「でんでんむしのかなしみ」を素材に、それを自分自身の体験と重ね合わせながら、絵本として表現したものであった。発表からは、絵本の制作における「原作の選択」「個人的な体験」「自己表現とは」といった絵本を表現する際の「動機」に関する問題提起があった。



発表② WANG HONGYING 氏（オウ コウエイ）（京都芸術大学大学院生）の『潮干狩り』は、爽やかな色彩とさまざまな視点からの情景で構成した、家族の潮干狩りのエピソードを表現したもので、自然に触れ合うことの大切さを主張した絵本であった。「教育教材としての絵本」「ページめくりの面白さ」、「読み聞かせ」といった問題が提起された。



発表③ 魏 辰宸氏（ギ チェンチェン）（京都芸術大学大学院生）の『夢』は、モンゴルの壮大な風景（絵）と老人の死をめぐる叙述が、対比的に語られる絵本であった。巧みな絵の描写力と、深い死生観の対比が印象的な絵本であった。「民族性」

「死生観」「叙述法」「画面の構成」などの絵本を構成する視点について問題提起された。



発表④ 曾 子安氏（ソウ シアン）（京都芸術大学大学院生）の『空を見た時』は、京都芸術大学大学院の2023年度研究助成に採択されたプロジェクト「長谷川集平絵本研究会」の活動の中で行われた絵本のグループ制作活動についての発表であった。絵本の共同の制作は、共同の学びでもあり、そのよさや運営の難しさについて語られた。



一人20分の短い発表時間であった。前半の10～15分程度を発表し、後半で、質問や感想、チャット欄のコメントを拾い上げながら、進行を進めた。

「作品発表」の前提として、作品を「制作するという視点」は、「研究」と並ぶ重要なアプローチである。また、この場合は、表現活動を通して見えてくる重要な意味を探りながら、まずは制作活動そのものを肯定した視点から、感想や意見を交換する場として進行を進めた。

【まとめ】

- ・リモートの発表は、参加のしやすさに比して、展示による作品鑑賞や作者の声や表情を読み取りながらの意見交換ができないため、批評的な言葉のみが、取り残されないように留意したいと考えた。
- ・結果としての作品を見るだけでは理解し得ない、作者の動機やコンセプトを聞くことで、新たに意味が立ち上がることが感じられた。そこから、意見交換が始まると、さらに深い話し合いにつながると感じられた。
- ・絵本の制作は、作家として作品を制作したり、自分の切実な表現活動の場であったり、子どもの成長を期待する視点であったり、共同の学びの場であったりするなど、様々な視点、立場が、想定できる。

（文責：辻政博）

ラウンドテーブル

① 絵本と戦争—非平和という概念を軸に

コーディネーター：穴澤秀隆（國學院大學栃木短期大学）

コメンテーター：藤本朝巳（絵本学会会長）

ゲスト：長野ヒデ子（絵本作家）

はじめに

今年度の絵本学会大会（1）のテーマは「希望としての絵本～明日を生きるために～」であった。—現代は自然災害が頻繁に起こり、また異常気象もある。さらに世界各地で地域紛争、国家間の戦争などが起こっている。まさに生きていくことの困難な時代である。そのような状況で「人は何を希望として生きていくことができるか」を一緒に考えてみようということになった。

そこでラウンド・テーブル（以下 RT）①では、「絵本」が明日を生きるための「希望」となりうるのか、その可能性や存在性について検討しよう、ということで実施された。

今回、「非平和」という用語を用いるが、その概念を簡潔に言うと、戦争の反対としての平和を考えるだけでなく、平和ならざるもの—「非平和」という観点からも平和を考えるということ。例えば教育現場で「平和とは何か」と問うと、子どもたちは「友だちと遊ぶこと」「よく眠ること」「帰る場所があること」など、と答えるそうである。そこで、身近で戦争がないことだけでなく、「暴力の不在」や、普通に安心して暮らしていけることを平和（2）と考えて RT を展開した。

国策紙芝居

まず長野さんが戦前、戦中に作られた国策紙芝居を紹介され、実際にその紙芝居を実演して下さった。なお、国策紙芝居については藤本が説明した（3）。

長野さんは童心社の創業者である稲庭桂子さんは戦前、国策紙芝居も書いていたが、戦後、二度とこのようなことがないようにと立ち上げた会社が童心社であったこと、また同社が紙芝居にこだわっている理由も説明して下さった。それから長野さんが国策紙芝居『櫛』を演じてくださり、「おかあさん」をテーマに話を繰り広げて下さった。

長野さんは紙芝居『櫛』のあらすじを語り、次のように語られた。「赤紙が来て、子どもは戦争に行ってしまう。お母さんという存在があるから、優しいお母さんに守られているから、若者が戦争に行くと、日本のために戦えると、この紙芝居は語っている。国策紙芝居は脚本が巧みで、大衆の心を掴む恐ろしい紙芝居であると思った。というのも、当時はお母さんを盾に、若い青年たちが戦争に行くことを煽る時代であったから。」

新美南吉の詩『天国』と絵本『てんごく』

長野さんのお話の前半で印象深かったのは、作家、新美南吉の詩に長野さんが画を描いた絵本『てんごく』を朗読して説明して下さったことである。「おかあさんたちはみんなひとつのてんごくをもっています」の言葉で始まるこの絵本の詩は、南吉が手帳に書いた『天国』で、公にされませんでした。公に発表したら、特高にひっぱられてしまうからです。」国策紙芝居が出たころ、南吉は世の流れに逆らうように「おかあさんはあるがままのおかあさんでいてほしい！ という気持ちでこの詩を書いたのだらう」ということをお話下さった。長野さんは絵本『てんごく』で母親におんぶされる子どもの心を描き、おんぶの文化と並び、おんぶの素晴らしさについても「あとがき」で述べている。（4）

大戦後の長野さんの作品作り

戦後は軍国主義的な考えの反省のもとに、それまでとは違う作品が出されるようになった。「私（長野）もお母さんを描きたい。しかし、全く違うお母さんを描きたいと思った。そういう作品を見て、作者も読者も互いがわかってくると思ったからです。」

長野さんはデビュー作『とうさん かあさん』を含めて、家族をテーマとした絵本作品が多い。また、お母さん像を描いたものが多い。「こういう絵本を描くのが、当たり前のことですが、平和につながります。というのも、人はお母さんから生まれて、そのことが自分のいのちにつながるのですから。」

平和の礎は日常の生き方から

後半では、長野さんが自作の絵本『おかあさんがおかあさんになった日』を読んで紹介し、この絵本が誕生した経緯、またお母さんと子どもの情愛、家族のありようが、平和の礎になるということを温かくユーモアも交えて話して下さった。この絵本は幼い子どもにもわかるんですよ。みんなに望まれて生まれてくることが、子どもにとって、どんなに嬉しい、大事なことから… こうして、平和な世の中が築かれていくと思います！」

絵本と紙芝居—その違いは

RTの後半に、穴澤さんから紙芝居についての質問があり、長野さんは絵本と紙芝居の違いも次のとおり簡潔に説明して下さった。なお紙芝居は長らく消耗品として扱われてきたが、現在は絵本と同様に大切にされるようになってきたことを強調された。

- 1 絵本は読者が絵の中に入り込んでいくもの。紙芝居は作品が観客に飛び出していくもの。
- 2 絵本は海外から来たものが多くあるのに対し、紙芝居は日本で生まれた文化である。
- 3 絵本は自分で読む、または読んでもらうが、紙芝居は演じ手がいて作品が観客の方に飛び出す。

- 4 絵本は綴じられてめくる、紙芝居はばらばら。綴じられていないことは自由で、いろいろと1枚の絵から生まれる可能性が大きい。抜き方でいろいろな表現ができ、抜きスピードでも変わる。
- 5 絵本をばらばらにして演じて紙芝居にはなりません。紙芝居を綴っても絵本にはならない。流れもリズムも違うもの。
- 6 絵の描き方が違う。絵本は絵を近くでじっくり自分のペースで読み、前のページに戻り確認することもできるが、紙芝居は遠目がきく絵で、演じる短い時間に内容、性格等を観客がつかみ取ることでできる絵。演じることで動き出す絵でなければつまらない。
- 7 絵本はめくる。紙芝居は抜く。
- 8 文字のない絵本もあるが、基本は絵の上にお話がかかっているのが絵本。紙芝居は裏面に脚本が書かれていて、演じ手がその脚本を見て演じる。
- 9 絵本は「文」、紙芝居は「脚本」。演じ手が上手に演じられるように、演じ方が書かれているので参考にするとよい。(5)

おわりに

RTは全体を通して、長野さんの暖かでユーモアに富む語り口で展開された。最後に、穴澤さんは「絵本の力を社会的な力にしていく、絵本の社会性ということを大切にすべき」とお話しになり、長野さんは、「絵本は子どもから大人まで、むずかしいことをわかりやすく描いている・・・子どもに目を向けることが大切」ということとお話しになった。

「私たちが、日常のなにげない生活をきちんと大切にすること、これが平和につながる。また私たちは子どもから学ぶことが多い」というまとめでRT①は終了した。

(今大会は、聖心女子大学の水島尚喜先生及び実行委員会の方々のご尽力で実施できました。皆さんに大変お世話になりましたことを、ここに感謝して、深くお礼申し上げます。)

(文責：藤本朝巳)

- (1) 2024年6月8日(土)～9日(日)、東京の聖心女子大学を拠点にオンラインで実施された。
- (2) 『平和創造のための新たな平和教育—平和学アプローチによる理論と実践』、高部優子・奥本京子・笠井綾 編、法律文化社、2022年、10—11頁参照。
- (3) 戦前、戦時中、街角に紙芝居屋が現れて、そこに子どもたちが集まってきた。当時、子どもたちは紙芝居を日々楽しみに待っていた。それは軍事的教育をするには格好の場であった。日中戦争開戦の1937年から終戦の45年までに1000点に及ぶ紙芝居が制作されたという。これらは、

日本の「正義」を宣伝する国策としての紙芝居であった。親子の情愛に満ちた物語と思われるものもあれば、戦意高揚をあからさまに謳うものなど、種々多様なもので、戦争で絶命する兵士の物語「忠魂の歌」や、真珠湾攻撃に参加した兵隊の母のけなげな生活を描く「軍神の母」のように、直接、戦争賛歌を描くものもあり、子どもたちの心を戦争へと煽ったのであった。

(参考文献)

『国策紙芝居からみる日本の戦争』「戦時下日本の大衆メディア」研究班 代表・安田常雄、勉誠出版、2018年

- (4) 南吉の詩『天国』を絵本にしましたことも、南吉が発表していなくて手帖に書かれていたからです。そのころ、お国のために戦う子どもを産むのが、国の誉れの母と言われていた時代に、南吉は早く死に別れたおかあさんへの思いから、おかあさんはあるがままでいてくれるだけでいいのだと言う詩を書いたのだと思います(長野)。

- (5) 『絵本のまにまに』長野ヒデ子、石風社、2023年、266—267頁参照。

『演じてみよう つくってみよう 紙芝居』長野ヒデ子 編著、右手和子、やべみつのり 著、石風社、2013年

作品

『てんごく』新美南吉 詩、長野ヒデ子 絵、のら書店、2023年

『おかあさんがおかあさんになった日』長野ヒデ子 作、童心社、1993年



② かがくい絵本と子どもの笑顔

～障がい児への眼差し

ゲスト：佐藤幹夫（ジャーナリスト／かがくいひろし元・同僚）

コメンテーター：水島尚喜（大会実行委員長／聖心女子大学）

コーディネーター：鈴木穂波（絵本学会理事／大阪大谷大学）

『だるまさん』シリーズ（ブロンズ新社、2008-2009）や『おもちのきもち』（講談社、2005）、『もくもくやかん』（講談社、2007）などで知られるかがくいひろし（1955-2009）の絵本は、没後15年を迎える現在も子どもたちから大きな支持を得ている。それはおそらく、かがくいの絵本から、子どもの身体に寄り添った感覚が伝わるためであろう。かがくいは特別支援学校に永らく勤務したが、そこで多くを学び、魅力的な「かがくいワールド」を生み出していったように思われる。

ラウンドテーブルでとりあげるのは、2014年第17回大会の「子どもと絵本をよみあうーかがくいひろしの絵本の場合ー」（話題提供者：廣田真智子・西脇由利子・水島尚喜、コーディネーター：鈴木穂波）、2019年第22回大会の『絵本作家 かがくいひろし』と『教育者 加岳井広』を架橋するもの」（話題提供者：沖本敦子・櫻井やよい・奥津篤子・加岳井武志、コーディネーター：水島尚喜）に続き、3回目である。今回は、特別支援学校時代のかがくいひろしの同僚であり、現在はジャーナリストとして「障がい」をテーマに積極的に発言されている佐藤幹夫さんをお迎えし、障がいのある子どもたちの存在からかがくいの表現世界の源泉を探ろうと試みた。

現在、その軌跡を振り返る展覧会「かがくいひろしの世界展」が全国巡回中である。会場の聖心女子大学グローバルプラザでも「子どもたちの笑い声がつなぐもの～絵本作家 かがくいひろしの世界～」（2024年5月27日～10月21日）が開催中で、教員時代の映像記録や制作物、未発表作を含む原画に囲まれた空間の一面に場が設けられた。本ラウンドテーブルは、その展示の様子を視聴者に伝えるところから始まった。

水島尚喜さんからは「かがくいひろしと子どもたちの存在性をめぐって」と題し、大学で友人として過ごしてきた中で知り得るかがくいが影響を受けた映像作品や舞台の経験が語られた。そこからは、外的なモノ世界への自己転移や内面的共感性の豊かさ、あらゆる存在に対するシンパシーといった「かがくいワールド」の根源を見出せる。特別支援学校での子どもたちとの関わりについてもエピソードから、他者に向けての活動が自身の幸せであるというかがくいの信念が垣間見られる。現代は、かがくい絵本のベースにある「愛ある知性と感性」が必要とされているのではないかと、子どもはそのことを直感的に知っているのだろうかという投げかけがされた。

佐藤幹夫さんからは『『重度の障がいをもつ子どもたち』とかがくい絵本』としてまず、2016年の津久井やまゆり園での

事件を受けて、加害者の言う重度の障がい者とは交流が成り立たないということはあると指摘がなされた。やりとりを繰り返す中で必ずそこに交流が生まれ、支援する側の技術が上がるにつれて交流はさらに深まる。佐藤さんご自身も特別支援学校で、受け身になることで子どもが見せる小さな反応に気づき、そこから変化が見え始めたという実感をお持ちである。重度の障がいをもつ子どもは、見る、聞く、触れる、揺れるといった感覚に大きく依存した世界にいる。そのため、授業の題材づくりでは、身体や情動への働きかけ、親しみやすさ、見通しの持ちやすさや期待感、歌や音楽を使った人との関わりに留意してきた。さらに、「やらされる」のではなく少しでも自発的な活動が目指されること、それは人間が生きて活動するうえでの基礎だと述べられた。

かがくいひろしとの関わりにおいては驚くほど志向性が一致し、好んだ身近なものの擬人化やブラックユーモア、シュールな笑いなどが絵本の発想に影響を与えていると推察された。そして、鈴木穂波の研究論文「かがくいひろし『おふとんかけたら』論」（『絵本学』16, 11-23, 2014）での考察や引用しているかがくいの発言からは、先述の授業の題材づくりにおける留意点と多くが符合する。さらに、身体に刻み込まれている特別支援学校時代に幾度も遊んだ手遊び歌「たけやぶのなかから」は、キャラクターの見立て、展開、それぞれの動作、オチに至るまでかがくい絵本的であり、かがくいのいう「もの」「音」「動き」「見立て」の要素が含まれていることが指摘された。こうした手遊び歌から得た手応え、嬉しさの共有、身体接触、期待感などは、おそらく絵本の深いところで生きているのではないかとまとめられた。

お二人のお話から、障がいのある子どもたちとの関わりがいかにかがくいの表現世界に影響を与えたのかが鮮明になった。かがくい作品の源泉にある子どもを笑顔にしたいという思いを実現するための術は、教員を目指し、そして目の前の子どもたちと誠実に向き合う中で磨かれてきたといえるだろう。

（文責：鈴木穂波）



第 27 回絵本学会定期総会議事録

(オンラインにて開催。出席者 52 名、委任状 82 名)

1. 開会の辞
2. 議長・書記の選出
議長に馬見塚昭久理事、書記に丸尾美保理事が選出された。
3. 会長挨拶・大会実行委員の紹介
藤本朝巳会長により、ご挨拶と大会実行委員会への謝辞が述べられた。
4. 役員交代について
10 名の新役員より、担当委員会の報告と挨拶が述べられた。
5. 新会長挨拶
水島尚喜新会長より挨拶が述べられた。
6. 2023 年度活動報告
佐々木由美子事務局長より、資料に基づき 2023 年度の活動報告が行われ、承認された。
7. 2023 年度決算・会計監査報告
佐々木事務局長より、資料に基づき 2023 年度の決算と会計監査結果が報告され、承認された。
8. 2024 年度活動計画について
佐々木事務局長より、資料に基づき 2024 年度の活動計画案が伝えられ、承認された。
9. 2024 年度予算案について
佐々木事務局長より、資料に基づき 2024 年度の予算案が伝えられた。今年度はゆうメールの信書基準が厳しくなったことと、3 年に 1 度の日本絵本研究賞の表彰があるための予算を増額しているとの説明がなされたうえで、予算案の採決が行われ、可決承認された。
10. 名誉会員について
藤本会長より、吉田新一氏と佐々木宏子氏を 2024 年度より名誉会員とすることが理事会で決定し、既にお二人に了承を得ていることが報告された。
11. 絵本学会倫理綱領の制定について
藤本会長より、長野麻子紀要編集委員長の主導により絵本学会倫理綱領案が作成され、弁護士の校閲も得たことが報告され、採決のうえで可決承認された。
12. 質疑応答
とくになし。
13. 閉会の辞
馬見塚議長より議長の退任と閉会の辞が述べられた。

2023 年度活動報告

◎第 26 回絵本学会大会の開催

2023 年 6 月 17 日(土)、18 日(日) 大阪大谷大学(大阪府富田林市)
オンライン開催
テーマ：“よりどころ”としての絵本

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラム 2023「絵本の製版と印刷」
2024 年 2 月 10 日(土)
近島哲男氏

◎紀要編集委員会の活動

・絵本学会研究紀要『絵本学』第 26 号の編集・刊行
・2023 年絵本研究参考文献目録(2023 年 1 月～12 月発行分)の作成
・2023 年絵本原画展・絵本画家展リスト(2023 年 1 月～12 月開催分)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

・機関誌『絵本 BOOKEND 2023』の編集・刊行、『絵本 BOOKEND2024』編集
・バックナンバーの販売促進

◎研究委員会の活動

・2023 年度絵本研究会の開催
「瀬田貞二さんについて」
2023 年 12 月 16 日(土)
講師：斉藤惇夫氏
・絵本研究助成
2022 年度助成(1 件 計 5 万)
①研究テーマ：中国における日本語絵本の翻訳に関する研究—子ども観のアプローチから申請者：劉娟(横浜国立大学非常勤講師)

◎広報委員会の活動

・『絵本学会 NEWS』の編集・発行
76 号(2023.7.30)、77 号(2023.11.30)、78 号(2024.3.31)
・ホームページの管理

◎日本絵本研究賞運営委員会の活動

・第 5 回日本絵本研究賞等候補(2023、2020-2023)の選考

◎役員理事選挙

2023年絵本学会 NEWS77号で告知。

投票期間 2024年1月31日末まで。

オンライン投票。

◎他学会等との連携

◎入退会

2023年度新入会者 63名 退会者 27名 除籍者 8名
(2024年3月末現在)



2024年度活動計画

◎第27回絵本学会大会の開催

2024年6月8日(土)、9日(日)

オンライン開催

聖心女子大学

テーマ：希望としての絵本～明日を生きるために～

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラム等の開催

◎紀要編集委員会の活動

・絵本学会研究紀要『絵本学』第27号の編集・刊行

・2024年絵本研究参考文献目録(2024年1月～12月発行分)の作成

・2024年絵本原画展・絵本画家展リスト(2024年1月～12月開催分)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

・機関誌『絵本 BOOKEND 2024』の編集・刊行、『絵本 BOOKEND2025』編集

・バックナンバーの販売促進

◎研究委員会の活動

・研究会の開催

・絵本研究助成

◎広報委員会の活動

・『絵本学会NEWS』の編集・発行 年3回(79、80、81号)の予定

・ホームページの管理

◎日本絵本研究賞運営委員会の活動

・日本絵本研究賞の運営検討・表彰

◎他学会等との連携

◎その他

新役員一覧

2024 - 2026 年度 学会役員・組織

会 長：水島尚喜

会長代理：穴澤秀隆

事務局長：佐藤博一

理事会（50 音順）：

穴澤秀隆

生駒幸子 （事務局長補佐）※

かわこうせい（日本絵本研究賞運営委員長）

佐藤博一

竹内美紀 （機関誌編集委員長）

永井雅子 （企画委員長）

馬見塚昭久（紀要編集委員長）

水島尚喜

宮崎詞美 （広報委員長）

山本美希 （研究委員長）

※「事務局長補佐」は会則に明記されていない役職ですが、
今期の理事会では2名体制で事務局を運営します。

監事（50 音順）：

石井光恵

杉浦篤子



絵本学会 2023 年度決算報告書

2023 年 4 月 1 日～ 2024 年 3 月 31 日

単位:円

科目	予算額	決算額	増減(予-決)	
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	4,340,000	4,564,000	-224,000	
賛助会員	140,000	140,000	0	7団体×20000
正会員	4,160,000	4,368,000	-208,000	8,000×(延493名+新入会53名=546名(3/31現在))
準会員	40,000	56,000	-16,000	延べ準会員a3名、準会員b4名+新入会準会員a3名、準会員b7名
②事業収入	270,000	545,012	-275,012	
研究活動事業収入	20,000	80,000	-60,000	
フォーラム収入	20,000	80,000	-60,000	チケット1000円 参加人数80名
研究会収入	0	0	0	オンライン開催のため無料
出版事業収入	250,000	465,012	-215,012	『絵本BOOK END』売上(朔北社2023分、文伸2021、2022、2023年分)
③雑収入	130,020	181,585	-51,565	
受取利息収入	20	20	0	
入会金収入	80,000	126,000	-46,000	入会金2000円×63名
雑収入	50,000	55,565	-5,565	出版物在庫販売、
事業活動収入合計	4,740,020	5,290,597	-550,577	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,350,000	2,023,485	326,515	
人件費支出	720,000	693,000	27,000	
事務局報酬支出	0	0	0	
事務局委託費	720,000	693,000	27,000	毎日学術フォーラムに委託
事業費支出	1,630,000	1,330,485	299,515	
消耗品費支出	30,000	2,675	27,325	事務消耗品費
印刷製本費支出	810,000	732,082	77,918	
絵本学会ニュース	150,000	112,164	37,836	絵本学会NEWS75.76.77号
研究紀要	400,000	323,070	76,930	『絵本学』24号
会員名簿	200,000	211,200	-11,200	
その他	60,000	85,648	-25,648	学会封筒印刷代
通信運搬費支出	500,000	372,241	127,759	NEWS等発送費・通信費
旅費交通費支出	40,000	0	40,000	理事会は原則オンライン
会議費支出	0	0	0	
広告費支出	160,000	150,852	9,148	
印刷物制作費支出	0	0	0	
HP更新作業費支出	160,000	150,852	9,148	
振込手数料	10,000	2,740	7,260	
雑支出	80,000	69,895	10,105	『研究倫理規程』作成費用含む
②活動費支出	1,170,000	802,311	367,689	
大会運営補助金支出	400,000	243,974	156,026	大阪大谷大学 400,000-156,026=243974
第26回 絵本学会大会補助金	400,000	243,974	156,026	
専門委員会活動費支出	620,000	508,337	111,663	
企画委員会	170,000	213,946	-43,946	チケット売上80000円-43946=36054円返金
紀要編集委員会	100,000	98,047	1,953	紀要編集等
機関誌編集委員会	100,000	95,620	4,380	『絵本BOOKEND2022』編集
研究委員会	100,000	100,000	0	研究会主催
広報委員会	100,000	404	99,596	『絵本学会NEWS』編集
日本絵本研究賞運営委員会	50,000	320	49,680	
研究助成費支出	150,000	50,000	100,000	
③出版事業支出	1,220,000	1,188,000	32,000	『絵本BOOKEND2023』
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,220,000	1,188,000	32,000	
事業活動支出合計	4,740,000	4,013,796	726,204	
事業活動収支差額	20	1,276,801	-1,276,781	
事業活動収支差額	20	1,276,801	-1,276,781	

II 投資活動収支の部

II 投資活動収支の部

1.投資活動収入	0	0	
	0	0	
投資活動収入計	0	0	
2.投資活動支出			
投資活動支出計	0	0	0
投資活動収支差額	0	0	0
III財務活動の部			
1.財務活動収入			
長期借入金収入	0	0	0
財務活動収入計	0	0	0
2.財務活動支出			
長期借入金返済支出	0	0	0
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV予備費支出	0	0	0
当期収支差額	20	1,276,801	-1,276,781
前期繰越収支差額	5,830,776	5,830,776	0
次期繰越収支差額	5,830,796	7,107,577	-1,276,781

■2023年度 財産目録

単位:円

	項目		一般会計	20周年積立金	合計
2023/3/31					
	手元有高				0
	りそな銀行		0		0
	ゆうちょ銀行		3,366,453		3,366,453
	定期貯金		0	1,500,000	1,500,000
	振替口座		2,055,813		2,055,813
	未収金		10,700		10,700
	仮払金		400,000		400,000
	未払金		▲2190		0
	計	①	5,830,776	1,500,000	7,330,776
2024/3/31					
	1年後の増減	②	1,276,801	0	
	結果 ①+②	③	7,107,577	1,500,000	8,607,577
	結果③の内訳				
	手元有高		0		
	りそな銀行		0		
	ゆうちょ銀行		2,361,121		2,361,121
	定期貯金			1,500,000	1,500,000
	振替口座		4,694,823		4,694,823
	未収金*		51,633		
	仮払金				
	未払金				
	計	④	7,107,577	1,500,000	8,607,577
			収支計算書の 前期繰越差額		財産目録の 次年度繰越金

* 未収金内訳: 紀要委員会返金1953円、日本絵本賞運営委員会49680円

	収入	支出
前年繰越	7,330,776	
会費収入	4,564,000	
事業収入	545,012	
雑収入	181,585	
事業費支出		2,023,485
活動費支出		802,311
出版事業支出		1,188,000
次年度繰越		8,607,577
	12,621,373	12,621,373

絵本学会 2024 年度予算

2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日

単位:円

科目	予算額	前年度予算額	増減(予-決)	
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	4,412,000	4,340,000	72,000	
賛助会員	120,000	140,000	-20,000	20,000×6口(現在6団体)
正会員	4,240,000	4,160,000	80,000	8,000×530名(現在約550名)
準会員	52,000	40,000	12,000	準会員13名で換算(現在a6,b11)
②事業収入	270,000	270,000	0	
研究活動事業収入	20,000	20,000	0	
フォーラム収入	20,000	20,000	0	
研究会収入	0	0	0	
出版事業収入	250,000	250,000	0	『絵本BOOK END』売上
③雑収入	140,020	130,020	10,000	
受取利息収入	20	20	0	
入会金収入	90,000	80,000	10,000	入会金2000円×45名
雑収入	50,000	50,000	0	出版物在庫販売等
事業活動収入合計	4,822,020	4,740,020	82,000	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,130,000	2,350,000	-220,000	
人件費支出	720,000	720,000	0	
事務局報酬支出	0	0	0	
事務局委託費	720,000	720,000	0	毎日学術フォーラムに委託
事業費支出	1,410,000	1,630,000	-220,000	
消耗品費支出	30,000	30,000	0	事務消耗品費
印刷製本費支出	610,000	810,000	-200,000	
絵本学会ニュース	150,000	150,000	0	絵本学会NEWS78.79.80号
研究紀要	400,000	400,000	0	『絵本学』26号(2024)
会員名簿	0	200,000	-200,000	
その他	60,000	60,000	0	学会封筒印刷代
通信運搬費支出	520,000	500,000	20,000	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	0	40,000	-40,000	理事会は原則オンライン
会議費支出	0	0	0	
広告費支出	160,000	160,000	0	
印刷物制作費支出	0	0	0	
HP更新作業費支出	160,000	160,000	0	
振込手数料	10,000	10,000	0	
雑支出	80,000	80,000	0	事務局移転費用

	②活動費支出	1,470,000	1,170,000	300,000	
	大会運営補助金支出	400,000	400,000	0	ポスター等制作費を含む
	第27回 絵本学会大会補助金	400,000	400,000	0	
	専門委員会活動費支出	920,000	620,000	300,000	
	企画委員会	170,000	170,000	0	
	紀要編集委員会	100,000	100,000	0	紀要編集等
	機関誌編集委員会	100,000	100,000	0	『絵本BOOK END』編集
	研究委員会	100,000	100,000	0	研究会主催
	広報委員会	100,000	100,000	0	『絵本学会ニュース』編集
	日本絵本研究賞運営委員会	350,000	50,000	300,000	3年間分の表彰および2024年分
	研究助成費支出	150,000	150,000	0	
	③出版事業支出	1,220,000	1,220,000	0	『絵本BOOKEND2024』
	編集作業費支出	0	0	0	
	制作費支出	1,220,000	1,220,000	0	
	事業活動支出合計	4,820,000	4,740,000	80,000	
	事業活動収支差額	2,020	20	2,000	
	事業活動収支差額	2,020	20	2,000	



第5回日本絵本研究賞選考結果報告

5回目となる日本絵本研究賞本選では、研究賞運営委員会よりノミネートされた3年間分の候補論文として、以下の6点が選考の対象となっていた。

- ①目黒 強「日常感覚を異化する絵本：安野光雅とヨシタケシンスケ」
- ②喜久山悟「儀間比呂志の美術一画法に映る沖縄の近・現代」
- ③杉浦篤子「北海道の絵本作家 1 手島圭三郎 発想の原点としての北方風土」
- ④尾崎すみ「長谷川武次郎のちりめん本出版活動の展開—『欧文日本昔噺』シリーズが 20 冊に達するまで」
- ⑤棚橋美代子、浜崎由紀『『観察絵本キンダーブック』（1927年～1944年）の落款』
- ⑥沼辺信一「光吉夏弥旧蔵のロシア絵本について」

加えて、日本絵本研究賞特別賞候補図書では、以下の2点が選考の対象となっていた。

- ①齋木 喜美子『沖縄児童文学の水脈』（関西学院大学出版局）
- ②矢野智司・佐々木美砂『絵本の中の動物はなぜ一列に歩いているのか 絵本の空間学』（勁草書房）

最終選考会結果

第5回日本絵本研究賞選考委員として理事会承認された以下の5名によって、5月25日、日本絵本研究賞規則に則り、オンラインにて最終選考会が行われた。

第5期日本絵本研究賞選考委員

○選考委員長：

松本猛（ちひろ美術館常任顧問、横浜美術大学客員教授）

【絵本・美術・創作】

○委員：

永田桂子（元京都女子大学大学院非常勤講師）【児童文学化学】

丸尾美保（元梅花女子大学教授）【比較児童文学、ロシア児童文学・絵本、絵本史】

水島尚喜（聖心女子大学教授）【造形美術教育学】

森 覚（大正大学非常勤講師）【比較文化比較芸術、表象文化論、仏教絵本】

5名の選考委員が慎重に審議し、以下のとおり受賞論文等を決定した。

第5回日本絵本研究賞本賞

- ・沼辺信一「光吉夏弥旧蔵のロシア絵本について」
（『白百合女子大学児童文化研究センター
研究論文集』26号、2023年3月、pp.1～56、所収）

第5回日本絵本研究賞奨励賞

- ・喜久山悟「儀間比呂志の美術一画法に映る沖縄の近・現代」
（齋木喜美子編著『立ち上がる艦砲の喰い残し：沖縄における教育・文化の戦後復興』関西大学出版会、2022年3月、pp.77～104、所収）

第5回日本絵本研究賞特別賞図書

- ・該当なし

【総評】

第5回日本絵本研究賞選考委員長 松本猛

第5回絵本研究賞本賞の「光吉夏弥旧蔵のロシア絵本について」は、各選考委員から高い評価が寄せられた。

沼辺氏の論文は「岩波のこどもの本」創刊に重要な役割を果たした光吉夏弥のロシア絵本コレクションについて考察したものである。歴史的背景をしっかりと把握したうえで、一冊ずつ出版年と持ち主の署名を調べるなど、緻密な調査に基づき入手先を推定し、光吉のロシア絵本に対する認識の深さを明らかにした。新たな知見がある労作である。1920年代ロシア絵本の評価についても優れた洞察があり、また、「岩波こどもの本」になぜロシア絵本がほとんど入らなかったかについての考察も優れたものである。

現代の日本の絵本の出発点に大きな役割を果たした光吉夏弥の絵本観を知るうえで貴重な研究論文だった。

日本絵本研究賞奨励賞の「儀間比呂志の美術 画法に映る沖縄の近現代」は、画家、版画家としての儀間比呂志の背景を分析した優れた論文だった。1923年（大正13）生まれの儀間の歴史的背景も語りながら、影響を与えた画家たちの作品を調査し、儀間作品への影響を分析している。ピカソの新古典主義時代の作品との比較やメキシコ美術のリベラやシケイロスやなどの影響を論じた点などは興味深いものだった。また、儀間の思想形成についても語られ、儀間比呂志研究としてすぐれたものである。ただ、絵本研究賞としては儀間の絵本についての論究がされていないのが残念であり、今後の研究を待ちたい。

棚橋美代子氏と浜崎由紀氏の「観察絵本キンダーブック」の落款については、研究論文ではないが、膨大な作品調査による資料であり、こうした地道な作業が研究に繋がることを

評価したい、という意見があったことを補足する。

絵本研究賞特別賞は、齋木喜美子『沖縄児童文学の水脈』と矢野智司・佐々木美沙『絵本の中の動物はなぜ一列に歩いているのか』がノミネートされた。前者は第45回日本児童文学学会賞受賞作であり、沖縄の児童文学論がメインに語られ、絵本関係論文は儀間比呂志論など一部に限られているという指摘があった。後者は「絵本は空間構成のプロセス」だという視点など、注目に値する論点も見られたが、先行研究と重なる部分も多いのではないかと指摘があった。

受賞には至らなかった他の4編の論文には、以下のような委員からの感想・指摘があった。

目黒 強「日常感覚を異化する絵本：安野光雅とヨシタケシンスケ」は、安野光雅を総特集した雑誌への寄稿文であり、安野光雅とヨシタケシンスケの絵本の手法を、「日常感覚の異化」という観点から、双方の特徴を論じている。物語絵本とは別種の絵本の存在と特徴にふれて、絵本分析と研究に一つの方向性を示した点が評価できる。

杉浦篤子「北海道の絵本作家 1 手島圭三郎 発想の原点としての北方風土」は、手島の経歴と活動を北海道の地と結びつけて、その作風を丁寧に紐解き、手島絵本の特徴を浮かび上がらせている。評論としてみれば優れているが、論文としては、手島の言葉や経歴を引用した論の進め方には、やや情緒的、観念的である面があった。

尾崎るみ「長谷川武次郎のちりめん本出版活動の展開—『欧文日本昔噺』シリーズが20冊に達するまで」は、長谷川武次郎のちりめん本の最盛期における長谷川商店の発展と、欧文日本昔話シリーズの13号から20号までについて、その著者、画家、原典を明らかにした労作である。ただし、ちりめん本が日本の絵本にどのような影響を与えたのかにもう少し踏み込んでほしかったという指摘もあった。

棚橋美代子、浜崎由紀「『観察絵本キンダーブック』(1927年～1944年)の落款」は、『観察絵本キンダーブック』という絵雑誌媒体中の「落款」を収集整理し、氏名の明らかになっていない作者の同定作業に資する内容となっている。該当する画家の絵本文化、児童文化、さらには美術文化での位置付けを検討する際の基準点ともなりうる可能性があり、資料的な価値が高いが、現時点では、第一次資料の収集にとどまっていることから、今後の研究の方向性に注目したい。

日本絵本研究賞特別賞図書は、候補作2点はいずれも受賞には至らなかったが、以下のような感想と指摘があった。

齋木 喜美子『沖縄児童文学の水脈』は、これまで学術的な研究成果の蓄積が乏しかった沖縄児童文学の実態と系譜を明らかにした点で、学術的意義を持っている。

内容的にも、通史的な観点から、一歩進めて個別の作家の思想形成の過程や作品分析について踏み込んで研究している点が評価された。

ただし本書は第45回日本児童文学学会賞を受賞している点や、児童文学研究の一部として絵本論が扱われている等の指摘があった。

矢野智司・佐々木美沙『絵本の中の動物はなぜ一列に歩いているのか 絵本の空間学』は、絵本を単なる図像学的な意味解釈ではなく、空間図像学とも呼称すべき地平から絵本構造に言及しようとする点において、ユニークであり、評価できる。他方、絵本体験を读者である子どもの遊びと結びつけて、めまいの体験(溶解体験)が得られると分析した点や、動物が絵本に登場する理由の一つとして、人間と人間ならざるものの境界を往復する体験であるとする論には独創性があった。

各選考委員からのコメント

【永田桂子】

絵本関係の著書・論文は、それぞれ年間100点を優に超えているため、推薦されてこなかった論考のなかには、未だ優れたものが残っていたのではないかと懸念しています。また、各研究のアプローチの視点も多岐にわたってきているため評価もむずかしくなっています。研究者の専門性が問われると同時に、評価者の専門性も問われます。推薦論文・図書の収集方法と共に選考委員の構成も今後の課題になると思います。

【丸尾美保】

今回の絵本研究賞は、授与が3年に1度に変更されてから最初の受賞であった。3年間選考を重ねてきた日本絵本研究賞運営委員会の方々の尽力に感謝したい。ただ、論文に関してはテーマが絵本作家研究と日本絵本史に関するものに偏ったことは、やや残念であった。作家論では、目黒氏と杉浦氏に比して、喜久山氏の「儀間比呂志の美術」は美術界との関係を具体的に述べて、優位性が認められた。尾崎氏、棚橋氏と浜崎氏、沼辺氏はいずれも絵本史研究の分野で長年研究を続けてこられているが、尾崎氏の論文は氏のちりめん本研究の一部であること、また棚橋氏と浜崎氏の落款リストは資料であることから、綿密かつ広範囲な調査と考察に長じている沼辺氏の論文を推した。

【水島尚喜】

「研究賞」、「特別賞」の各候補からは、「絵本学」という領域の多様な研究視点の広がりを実感させられました。いずれもアカデミックな要点を踏まえつつ、絵本という媒体の独自の魅力を伝えるための工夫をみてとることができました。個人的には、棚橋美代子、浜崎由紀両氏による形態学的観点による分析のお仕事、印象に残りました。日本の絵本学の水準を対外的に示す意味でも、この賞の存在の大切さを思います。

【森 覚】

第5回日本絵本研究賞・奨励賞に選ばれた論考はいずれも学術的に優れた論考として評価できる。ただし選考では今回該当なしの特別賞を含め、絵本学の対象範囲がまだまだ明確でないことを実感させる議論もあり、学術的な体系化をよりはかる必要性を感じた。また制度として三年ごとの受賞発表は絵本研究を評価するスピード感に著しく欠ける。願わくは絵本学会会員及び若手研究者の評価もはかり、絵本学を活性化させる改善を望みたい。

以上の結果を踏まえ、6月8日、聖心女子大学における第27回絵本学会大会において、表彰式が行われた。選考委員長の松本猛氏より選評があり、藤本朝巳会長から、第5回日本絵本研究賞本賞受賞者の沼辺信一氏に賞状と副賞が手渡された。尚、日本絵本研究賞奨励賞となった喜久山悟氏はオンラインで表彰式に参加した。(文責：水島尚喜)



第5回日本絵本研究賞表彰式で受賞された沼辺信一氏（左）
2024年6月8日、聖心女子大学グローバルプラザにて

第6回日本絵本研究賞・日本絵本研究賞特別賞

絵本についての優れた論文、評論、報告及び著書の推薦を募集します。

【経緯】

1997年に創設された絵本学会は、創立20周年を記念して、絵本研究や評論活動のさらなる活性化を図るため、「日本絵本研究賞」を創設しました。

絵本学会の主催する本賞が、より一層、今後の絵本研究の発展や深化に寄与することを目指し、2023年度の絵本学会理事会において見直しの検討を行いました。その結果、第6回より以下二点の変更が加えられます。

- 1) 研究賞および奨励賞は、対象期間内に学会・大学・博物館・美術館の紀要、雑誌、展覧会図録などに発表された絵本学会員の単独または共同執筆による論文・評論・報告を対象とする。
- 2) 特別賞は、対象期間内に発表された特にすぐれた絵本研究や評論活動として認められる公刊された図書を対象とする。

日本絵本研究賞・日本絵本研究賞特別賞は、論文等、著書に文字数の制限無く、対象期間内に発表された絵本研究の中から、最も優れた作品を選び、表彰します。絵本学会は、学会員の協力を得ることにより、この賞が日本の絵本研究と絵本学会の発展につながることを確信して、全力で取り組んでいます。会員の皆様からのたくさんのおすすめをお待ちしています。

◎主催 絵本学会

◎賞の種類

「日本絵本研究賞」(以下研究賞とする)：絵本研究や評論活動に関するすぐれた論文等に対して与えられます。今後に期待できる意欲的な論文等に対しては日本絵本研究賞奨励賞が与えられます。

「日本絵本研究賞特別賞」(以下特別賞とする)：絵本研究や評論活動に関する特にすぐれた著書に対して与えられます。

◎賞の対象

2023年10月1日～2026年9月30日の期間内に発表された、絵本についての研究論文や評論、報告(実践、調査報告)。

*ブログ、SNS、個人的な趣の強い発表などは除きます。研究賞は、学会・大学・博物館・美術館・文学館等の紀要、展覧会図録などに発表された論文、評論、報告を対象とし

す。紀要などへの掲載回数や文字数は問いません。特別賞は、上記期間に公刊された著書を対象とし、特に優れていると認められる場合に授与します。

尚、研究賞の対象となる論文等は、絵本学会会員の単著または共著のものに限ります。特別賞の対象となる著書は、公刊されたものに限りますが、著者は絵本学会会員でなくてもかまいません。

◎2024年次推薦(自薦及び他薦)受付期間

2024年11月1日(金)～11月30日(土)必着。

対象：2023年10月1日～2024年9月30日の期間に発表された論文、評論、報告及び著書

◎推薦宛先・問い合わせ先

〒430-8533 静岡県浜松市中央区中央2-1-1

静岡文化芸術大学2F事務局かわこうせい研究室 気付

「日本絵本研究賞運営委員会」受付宛

e-mail：info@ehongakkai.com

推薦方法等は絵本学会ホームページでも公開します。

◎推薦資格

- ・絵本学会会員。2024年10月1日時点で入会手続きが完了していることとします。
- ・研究賞は絵本に関する論文、評論、報告を、特別賞は絵本に関する著書を推薦できます。

◎推薦方法・推薦規程

- ・推薦に際しては絵本学会ホームページから所定の書式をダウンロードしてください。送付先を明記した封筒には「日本絵本研究賞」と朱書きしてください。
- ・研究賞は、推薦される論文・評論・報告の著者名、タイトル、掲載誌(掲載URL)、出版社(発行者)、出版年月等を明記し、200～300字程度の推薦理由を付け、抜き刷りまたはコピー1部を添えてお送りください。
- ・特別賞の場合は著者名、タイトル、出版社(発行者)、出版年月等を明記し、200字～300字程度の推薦理由を付けてお送りください。自薦の場合は、該当の著書1冊をお送りください。(返却希望の場合は、返送先を明記したレターバック等を同封してください。)
- ・自薦・他薦は問いません。
- ・それぞれについて、お一人で複数の推薦をすることが可能です。
- ・メールによる問い合わせの際には、「日本絵本研究賞」と但し書きをしてください。

◎入賞発表

2027年の絵本学会大会で発表します。次いで『絵本学会NEWS』、機関誌『絵本BOOKEND』に掲載します。

◎表彰

日本絵本研究賞、日本絵本研究賞特別賞の表彰式は2027年開催予定の絵本学会大会において举行します。

◎賞

日本絵本研究賞：賞状及び賞金

日本絵本研究賞奨励賞：賞状及び賞金

日本絵本研究賞特別賞：賞状及び賞金

◎受賞作品の掲載

受賞作品の要旨を、直近で発行予定の『絵本学会NEWS』、あるいは機関誌『絵本BOOKEND』に掲載します。

◎選考委員

理事会において「第6回日本絵本研究賞・日本絵本研究賞特別賞」の新たな選考委員の選任を行います。決定しだいお知らせします。

研究委員会からのお知らせ

◎2024年度絵本学会研究会開催のお知らせ

研究委員会では、会員の皆さまの絵本研究の発展をサポートできるよう、絵本研究会を開催しております。2024年度は、研究発表および作品発表を募集し、口頭発表会として実施する予定です。研究成果の発表の機会としてご活用いただきたく、皆さまのご応募をお待ちしております。

2024年度絵本学会研究会

日時：2024年11月頃（予定）

募集内容：研究発表および作品発表。絵本学・絵本文化研究にかかわるもの（口頭、文書等を含め未発表のもの）。

募集の詳細・日程・発表者については絵本学会ホームページの「研究会」の欄にてお知らせいたします。ぜひ以下のQRコードのホームページから詳細をご確認いただき、奮ってご応募ください。応募多数の場合は、審査をすることがあります。



<https://ehongakkai.com/kenkyu/kenkyu.html>

紀要編集委員会からのお知らせ

『絵本学』第27号投稿募集

『絵本学』第27号(2025年3月刊行予定)の投稿を募集します。投稿に当たっては、下記の投稿規程ならびに絵本学会ホームページに掲載の執筆要項を十分お読みくださいますようお願いいたします。

投稿締切日：2024年9月30日(必着)

原稿送付先・問い合わせ先：ehongaku.kiyo@gmail.com
絵本学会紀要編集委員会

研究紀要『絵本学』投稿規程

1. 投稿資格

絵本学会会員および準会員で、当該年度8月31日までに会員資格を有していること。

2. 投稿の種類

絵本に関する研究論文、研究ノート、論説で未発表のもの。
【研究論文】研究の視点や手法、理論展開および結論に独創性や説得力が高く認められるもの。
【研究ノート】研究の基礎データになる資料調査・実践などの報告、あるいは理論構築の可能性が認められるもの。
【論説】学術的な論で、注目すべき研究・作品・作家・展覧会・活動を取り上げての評論など。

3. 投稿原稿の採否

- 1) 査読に基づき、紀要編集委員会が採否を決定する。必要に応じて紀要編集委員の外に査読を依頼する。
- 2) 紀要編集委員会は執筆者に内容の修正を求める場合がある。
- 3) 採否の結果は当該年12月末までに執筆者に通知する。執筆者は採否の結果について説明を求めることができる。この場合、紀要編集委員会は申し出内容を精査の上、適正範囲内で回答する。

4. 執筆要領

執筆は別に定める「執筆要項」(絵本学会ホームページに掲載)に則ること。

5. 著作権

- 1) 『絵本学』に掲載される論文等の著作権は執筆者に帰属する。執筆者は掲載決定後、絵本学会に、著作権のうち複製権の行使を再許諾権付きで許諾するものとする。

- 2) 論文等に引用される文章、図版、写真等の著作権に関する事項はあらかじめ執筆者の責任において処理すること。

6. 研究倫理

- 1) 研究は十分な倫理的配慮の上に行うこと。
- 2) 個人事例を取り上げる際には、個人情報や秘密を保護することに配慮する。研究対象者・保護者・所属長、研究協力者などから文書による承諾を得、論文等にその旨を記載する。

7. 投稿締切日

当該年9月30日(必着)

8. 刊行

当該年度内

9. 原稿の送付

- 1) 原稿は電子データをメールに添付して送付する。
- 2) 原稿送付先：絵本学会紀要編集委員会(メールアドレスは別に指定)

規程の改廃は理事会の審議を経て決定される。

改正日 2022年3月9日

事務局より

事務局移転にあたって 絵本学会事務局長 佐藤博一

絵本学会に入会して間もない20年ほど前、本務校である京都芸術大学（当時の京都造形芸術大学）で第8回大会を開催することになり、その議案のため学会運営の会議に参席したことがありました。会長の今井良朗先生、事務局長の笹本純先生、そして、その後も長年にわたって学会を牽引される理事、運営委員の先生方からご高教を賜ったことや、太田大八先生のととも格好良いセーター姿が今もはっきりと記憶に残っています。

今期から佐々木由美子事務局長の後任として、絵本学会の事務局を担当させていただくことになり、引き継ぎ作業が進むにつれ、重責を果たすことへの緊張感がいっそう高まっておりますが、水島尚喜会長はじめ、理事各位のご協力を仰ぐとともに、これまでに薫陶を受けた多くの先生方の学会運営に対する情熱を思い出し、微力ながらしっかりと務めてまいりたい所存です。

現在の学会事務は、外部委託事務局として毎日学術フォーラムを代表所在地と運営しています。本部は私のほか、事務局長補佐として生駒幸子理事にご尽力いただくことで、相互の連携を強化し、円滑な運営を目指します。

会員のみなさまのご理解、ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

【絵本学会委託事務局連絡先】

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1
パレスサイドビル 9F
(株) 毎日学術フォーラム内
電話：03-6267-4550
Mail：maf-ehongakkai@mynavi.jp

【絵本学会本部連絡先】

Mail：office@ehongakkai.com

【絵本学会ウェブサイト】

<http://www.ehongakkai.com>

絵本学会理事会議事録

2023年度 絵本学会 第4回理事会 議事録

日時：2024年2月3日（土）14：00～ 於：オンライン

出席：藤本朝巳（会長） 丸尾美保（会長代理）

佐々木由美子（事務局長） 鈴木穂波 長野麻子

馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

欠席：甲木善久

記録：（長野先生） *次回、馬見塚先生。以後、五十音順で担当

議事次第

前回 2023年度第3回絵本学会理事会議事録及び第7・8・9・10回メール審議議事録確認

いずれも承認された。

◆報告事項

1. 各委員会報告

①紀要編集委員会

1)『絵本学』26号について(2024年3月31日発行予定)
長野委員長より投稿および採用件数、編集の進捗状況について報告がなされた。

投稿件数：17編（うち2編は不備のため不受理）

採用件数：研究論文1編、研究ノート5編

2) 紀要編集委員長の日本絵本研究賞運営委員の兼務について

長野委員長より業務過多のため、今年度の日本絵本研究賞運営委員会の選考にかかわる業務免除の希望が出され、承認された。さらに今後、兼務を見直すべく、日本絵本研究賞運営委員会規程の改正の検討を、次期理事会への申し送り案件とすることが確認された。

②研究委員会（資料1）

斎藤惇夫先生ご講演「瀬田貞二さんについて」アンケートについて

鈴木委員長より12月16日にオンラインで開催された研究会の報告がなされた。

参加者：会員43名、一般60名。参加者のアンケート結果は資料の通りである。講演録を発行予定である。

③広報委員会（資料2）

NEWS78号発行スケジュールについて

馬見塚委員長より資料の通りの内容で勧められることが報告された。

原稿締切：3月14日 発行部数：3月末に会員の入退会を確認後、確定。

④機関誌編集委員会（資料3）絵本BOOKEND2024企画案について

藤本委員長より資料の通りの内容で進めることが報告された。次期機関誌編集委員長が編集を引き継ぐ。

⑤事務局より（資料4）

ちひろ美術館「日本の絵本展」終了報告
佐々木事務局長より資料の通り、報告された。

⑥企画委員会より

山本委員長より2月10日開催予定のフォーラム「絵本の製版と印刷」の準備状況について報告がなされた。申込者は100名を超えている。講師の近島さんがご病気のため、車椅子利用希望とのことである。

⑦日本絵本研究賞運営委員会

水島委員長より研究賞推薦の応募状況が報告された。
応募件数：論文4編、図書2編 2月末に委員会を開催し、審査と最終決定を行う。

⑧第26回絵本学会大会実行委員会

鈴木実行委員長より大会中に怪我をされた会員が、現在もリハビリ中であることが報告された。費用に大会の保険を適用するが、大会会計は決算済みのため、事務局会計より支払いを行う。

2. 事務局より

2025年度の絵本学会大会開催が予定されていた白百合女子大学から、開催校辞退の連絡があった。新たな開催校について検討する必要があるが、次期理事会に継続案件として引き継ぎたい。

◆審議事項

1. 第28回絵本学会大会について（大会実行委員会 資料5）
水島実行委員長より資料の通り報告がなされた。オンライン開催のためのWebinarとMeetは無料で使用可能。大会概要は承認されたが、テーマの「『希望』としての絵本」の趣旨が前回大会の「『よりどころ』としての絵本」の趣旨と似通っているため、再考が求められた。

2. 「絵本学会倫理綱領」の策定について

（紀要編集委員会 資料6）
長野委員長より資料の通り、「絵本学会倫理綱領」（案）の策定について説明がなされた

1) 策定までの経緯：2022年3月に行われた『絵本学』投稿規程改正の際に、紀要編集委員会は絵本学会に研究倫理審査委員会の設置および研究倫理規程の制定を提案したが、その後の調査等から「倫理綱領」の制定が急がれることを認識し、綱領案の策定に至った。倫理綱領策定のために、専門委員会の設置が望まれるが、現状では新設に時間を要するため、紀要編集委員会で原案を作成し、以後は理事会に諸手続きを委ねたい。

2) 「絵本学会倫理綱領」（案）のねらい：絵本学会会員が常に倫理観に基づいた学会活動を行い、適切な倫理的手続きを経て、研究の実施と成果の公表を行うことを定めた綱領として、人権の尊重を筆頭に研究実施における倫理的配慮、情報管理の厳守、研究成果の公表に伴う責任を各条項に記した。

理事からの意見：

- ・慶應大の倫理綱領が参考になる。条文には「～ならない」等の禁則が書かれたものよりも目標が書かれたものの方が良い。さらに余裕があれば、冊子体も作成し、詳細を補うと良い。ワーキンググループまたは専従の委員会を発足し、綱領制定と冊子作成の二段階を踏むことが望まれる。また絵本学においても人を対象とする研究が多いため、その研究倫理審査を学会が行うのか、あるいは、会員の所属機関の研究倫理審査委員会に委ねるかという議論も必要であろう。
- ・条文は法律の観点から専門家にチェックを受けるのが良い。今年度学会予算に弁護士費用を計上している。「子ども」「児童」の言葉を条文に入れることについても検討されたい。

綱領案の法的チェックを松本亮一弁護士（藤本会長紹介）に依頼し、助言に沿って、今後、理事会で修正や審議の継続を行っていくことが承認された。

3. 2024年度研究助成応募申請について

（研究委員会 資料7①②）

鈴木委員長より応募申請の募集要項について資料の通り説明がなされ、承認された。

4. 事務局より

①新入退会者について（資料8）

下記の新入会者4名および退会者9名が承認された。

新入会者：今川 優美 仲本 美央 依田 結衣
木村 真理

退会者：土永 葉子 細田 あかね 高原 典子
加藤 万也 内原 香織 藤井 莉子
山崎 朋香 吉田 進み矢 仁平 義明

また、佐々木事務局長より1月以降の入会申込者には年度末のため、承認後の申込者へのメールに次年度からの入会扱いも可能であることの文言を添えることが提案され、承認された。

②理事選挙について

選挙管理委員会より投票数が51であったことが、佐々木事務局長を通じて報告された。低投票率のため、投票期間の延長の是非について討議されたが、告示と選挙は正常に行われたため、延長すべきでないとの結論に至った。ただし、投票率の向上に向けた施策が必要であることが確認された。今後、選挙管理委員会により開票が行われた後、開票結果が報告される予定である。

5. その他

次回の予定 3月5日 20時

2023年度 絵本学会 第5回理事会 議事録

日時：2024年3月5日（火）20：00～22：15

於：オンライン

出席：藤本朝巳（会長） 丸尾美保（会長代理）
佐々木由美子（事務局長） 鈴木穂波 長野麻子
馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

欠席：甲木善久

記録：（馬見塚） *次回、水島先生。以後、五十音順で担当

議事次第

前回 2023年度第4回絵本学会理事会議事録の確認

⇒各委員会報告④機関誌編集委員会の内容、「次期機関誌編集委員長が編集を引き継ぐ。」の部分「次期機関紙編集委員長が、2025年度の編集については引き継ぐ。」に修正した上で、承認された。

◆報告事項

1. 各委員会報告

①企画委員会

絵本フォーラム実施報告（資料1）

⇒山本委員長より、実施に到るまでの経過等も含めて結果が報告された。

②紀要編集委員会

『絵本学』における「絵本研究参考文献目録」と「絵本原画展ならびに絵本に関連する展覧会リスト」の検討に

ついて

⇒長野委員長より、「絵本研究参考文献目録」と「絵本原画展ならびに絵本に関連する展覧会リスト」について、分量が多く、編集担当者の過剰な負担になっている現状が報告され、見直しが提案された。協議の結果、過剰な負担になっている現状が共通認識され、学会事業の統廃合も視野に入れた抜本的な改革が必要であることを、次期理事会へ申し送ることが確認された。

③日本絵本研究賞運営委員会（資料については当日）

2023年度日本絵本研究賞審査結果報告

⇒水島委員長から、年次優秀賞として、日本絵本研究賞2点、特別賞2点が選ばれたこと、3年分の年次優秀賞のなかから選定される第5回日本絵本研究賞の推薦作品として、研究賞6点、特別賞2点が選ばれたことが報告された。今後、新たに立ち上げる選考委員会の審査によって研究賞と特別賞が決定され、第27回絵本学会大会にて表彰される予定。

また、学術会議協力研究団体の立場から、絵本学会員以外の論文にまで審査対象を広げて審査することに対する問題等の共有が行われ、研究賞の在り方について対応及び改革が必須であることが確認された。

2. 事務局より

クロネコ DM 便は廃止に伴うクロネコゆうメールの信書の扱いおよび審査期間（資料2）

信書の審査が厳格化、発送前に事前審査が必要

- ・信書の審査は添え状だけではなく、学会誌やニュースレターなども対象。
- ・事前審査結果が出るまで最大7営業日必要。
- ・信書に該当する場合、ゆうメールでは出せず、定形外などの郵便で対応

⇒佐々木委員長より、クロネコ DM 便の廃止と、新しく始まったクロネコゆうメール便についての説明があり、信書の審査が厳格化したことが報告された。協議の結果、予算的には厳しくなるが、今回（4月発送）は「定形外郵便」を使うことが確認された。

◆審議事項

1. 第28回絵本学会大会について（大会実行委員会 資料3.4）

- ・プログラム
 - ・予算案
- ⇒水島大会実行委員長から、プログラムについて提案され、各研究発表の座長等、詳細が決まった。

2. 「絵本学会倫理綱領」の修正案について

(紀要編集委員会 資料5)

⇒長野理事から、資料に基づき修正案について説明がなされた。本年6月の総会における議案とすることを前提に、次回理事会で再度審議することが確認された。

3. 事務局より

①新入・退会・除籍者について(資料6)

以下の新入会者・退会者・除籍者(敬称略)が承認された。

新入会員:

正会員 富田泰代 白山久美子 戸次佳子
大村茉莉恵 以上4名

退会:伊丹弥生 小宮山民人 仲明子 古川伸子
山下紗織 川勝泰介 以上6名

2年間会費未払による除籍者:井ノ口峰子 上野康治
小作恵子 坂部仁美 西隆太郎 本田明菜
山崎三英子 横山仁雄 以上8名

②後援依頼について(資料7①②)

北海道立文学館「絵本作家 降矢なな原画展」

開催日時 2024年6月22日(土)～8月25日(日)

⇒佐々木事務局長から資料に基づいて提案され、承認された。

4. その他

⇒佐々木事務局長から、各委員会の決算報告を3月中旬に提出するように指示があった。

2024年度 絵本学会 第1回理事会 議事録

日時:2024年5月19日(日)20:00～22:06

於:オンライン

出席:藤本朝巳(会長) 丸尾美保(会長代理)
佐々木由美子(事務局長) 鈴木穂波 長野麻子
馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

欠席:甲木善久

記録:山本美希 五十音順で担当

議事次第

前回2023年度第5回絵本学会理事会議事録および2024年度第1回メール審議議事録の確認

→佐々木事務局長から説明があり、承認された。

◆報告事項

1. 委員会報告

⑨紀要編集委員会

絵本学会倫理綱領について(資料1)

→絵本学26号の刊行が報告された。倫理綱領を6月の総会にて審議事項とし、承認された場合はその日から施行となることを確認された。

⑩研究委員会

2023年度の活動報告と振り返り(資料2)

→研究委員会の3年間の総括と、今後の課題が示された。

⑪機関誌編集委員会

『絵本BOOKEND』発行スケジュールについて(資料3)

→9月に校了の予定で進めていることが示された。

⑫広報委員会

NEWS79号について(資料4)

→原稿締め切りは6/30。大会報告の執筆担当者を決定し、原稿を期日までに提出することが確認された。

⑬日本絵本研究賞運営委員会

日本絵本研究賞規則の改訂について(資料5)

→現状での課題と検討の過程が示され、改訂案では研究賞および奨励賞については「本学会員」の執筆したものであることに限定し、特別賞については「公刊された」図書に限定することが提案され、承認された。

2. 第27回絵本学会大会実行委員会より(資料6)

→各室の担当や配信方法、配信場所について現段階での資料が示された。また、作成中の大会要項(ウェブサイト)も示され、準備の状況が共有された。

◆審議事項

1. 後援依頼について

「ブラチスラバ世界絵本原画展(仮題)」(資料7①②)

2024.10.12～2026.1.12

→佐々木事務局長から説明があり、承認された。

2. 2023年度決算報告(資料8①②)および2024年度予算案について(資料9)

→佐々木事務局長から説明があり、決算報告と予算案ともに承認された。

3. 総会資料および2023年度事業報告および2024年度活動計画について(資料10)

→佐々木事務局長から説明があった。次期理事の記載の修

正、2024年度の活動計画（案）の紀要編集委員会の活動の部分に修正を加えることで、承認された。

次回の子定

新旧合同理事会 2024年6月8日（土）

→総会資料の最終確認と、新旧理事の顔合わせを行う。時間についてはメールで周知し、出席についても後ほど回答を集めることになった。

2024年度理事会 第1回メール審議議事録

日時：2024年4月1日（月）発信

回答：藤本朝巳（会長）丸尾美保（会長代理）

佐々木由美子（事務局長）鈴木穂波 長野麻子
馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

◆審議事項

1. 新入会員について

以下の新入会者（敬称略）が承認された。

入会者：

正会員 長谷川祥 安藤準佑 森景子 佐賀のり子
宮下理恵子 小川繭子 計6名

退会：伊東れい 大野まり子

白百合女子大学児童文化センター

2. 後援依頼

以下の主催団体より後援名義使用の申請があり、絵本学会として後援することが承認された。

①ちひろ美術館・東京

タイトル：「いわさきちひろ ぼつご50ねん こどものみなさまへ みんななかまよ」

安曇野ちひろ美術館 2024年6月8日～9月1日

ちひろ美術館・東京 2024年10月12日～2025年1月31日

②軽井沢絵本の森美術館

タイトル：「2024年夏展 かこさとし絵本への「まなざし」
2024年6月14日～10月14日

3. 三学会連携事業について

以下の企画を三学会連携事業とすることが承認された。

「語り継ぐ」シンポジウム 「三宅興子先生のお仕事を振り返る」

日時 2025年度内（日程は後日決定）

会場 大阪府立中央図書館

大会実行委員長 福本由紀子（武庫川女子大学）

2024年度理事会 第2回メール審議議事録

日時：2024年5月1日（水）発信

回答：藤本朝巳（会長）丸尾美保（会長代理）

佐々木由美子（事務局長）鈴木穂波 長野麻子
馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

◆審議事項

1. 新入会員について

以下の新入会者（敬称略）が承認された。

入会者：

正会員 遅文俊 及川康希

TJANDRA HENNY（チャンドラー・ヘニー）

井上征剛 市川亜弥子 秋山美和子 計6名

準会員 b LUO JIAYU（ラクカギョク）正木桃子 計2名

退会：石川素子

2. 三学会合同声明について

パレスティナにおける事態についても三学会共同で声明を出すことを検討すべきではないか、との英語圏児童文学会からの提案を受け審議した結果、おおむね賛成ではあるが、政治的な問題も含まれているので慎重に検討すべきだという意見もあった。

2024年度理事会 第3回メール審議議事録

日時：2024年6月1日（土）発信

回答：藤本朝巳（会長）丸尾美保（会長代理）

佐々木由美子（事務局長）鈴木穂波 長野麻子
馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

◆審議事項

1. 新入会員について

以下の新入会者（敬称略）が承認された。

入会者：

正会員 増原真緒 園田義之 三宅未穂子 伊藤邦彦

亀井佳代子 福井みどり 服部明子 博多歩

高橋貴美 細川和子 山成美穂 富山繁美

佐倉桃史 計13名

準会員 b：藤井かのん 任帥 ZHU BOYA 木村友紀

計4名

退会：藤井スミ苑 佐々木豊（2024年度末）

編集後記 (50音順)

今回より広報委員として絵本学会 NEWS を担当させていただくことになりました、玉川大学の博多哲也と申します。弊学では映像メディア領域を担当しています。本稿では挿絵を担当させていただきました。安心できる紙面づくりを目指して参ります。宜しく願い致します。

(博多哲也)

ご無沙汰しております。コロナ禍もあって、しばらく絵本学会から遠ざかっておりましたが、この度、広報委員を担当することになりました。特に Web や SNS などを活用した広報活動に貢献できたらと思います。何卒よろしく願いいたします。

(正木賢一)

広報委員二期目を勤めさせていただくことになりました。これからも会員の皆さまのお手元に、絵本と共に置いていただけるような「絵本学会 NEWS」を目指していきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

(松本由美)

絵本学会 NEWS79 号の発行にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。今年度より3年間の新しい広報委員会が始まりました。会員の皆様のコミュニケーションの場となる紙面づくりに努力してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

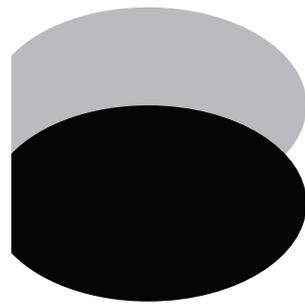
(宮崎詞美)



イラストレーション：博多哲也

※イラストレーションを許可なく無断転載、コピー、再配布すること
はご遠慮ください。

MEMO



絵本学会